

日本気象学会1997年度春季大会ベストポスター賞の受賞者決まる

日本気象学会1997年度春季大会では講演企画委員会による新企画として、ポスター発表の活性化と内容の向上、さらに大会参加者数の増加を目標に、ベストポスター賞の贈呈が行われました。新しい大会方式では一般発表はすべてポスター形式となりましたが、不慣れなポスター発表は敬遠されて参加者数が激減するのではないかと、なにかしら対策を講ずるべき、というのがこの企画の動機のひとつでした。ポスター発表の活性化と内容の向上が目的なので、ベストポスター賞の評価基準として以下の点に焦点が当てられました。

- (1) ユニークで印象に残り苦勞のあとが伺えるようなポスターを表彰する。
- (2) 他分野の者にも分かり易いお手本となるようなポスターを表彰する。
- (3) 学術的な内容も評価の対象となるが、学会賞や山本・正野論文賞のように学術水準を重点的に評価するものでない。

講演企画委員が短時間にすべてのポスターを見て評価するのは実際問題不可能ですから、1次選考は大会参加者全員にお願いすることにしました。受付で大会参加者(754名)には投票用紙(3日分)が手渡され、無記名投票により大会3日間を通して連日上位2件ずつ計6件のポスターが受賞候補作品としてノミネートされました(1日目:井上裕史 [F102], 伊藤昭彦 [G102], 2日目:楠研一 [G210], 別所康太郎 [G221], 3日目:山田広幸 [G313], 佐藤晋介 [G311] <講演者名のみ記載>)。最終選考は講演企画委員会全員と実行委員会の代表、さらに次期実行委員会の代表からなるベストポスター賞推薦委員会により行われました。推薦委員は6件のポスターを再度見直し、無記名投票でベストポスター賞1件を選出しました。

開票の結果、この輝かしい第1回日本気象学会ベストポスター賞には筑波大学生物学研究科大学院の伊藤昭彦会員が選ばれました。伊藤会員には住講演企画委員長から賞状、記念品、および副賞として次期大会懇親会招待券の目録が贈呈されました(写真1)。また、ノミネートされた6名の会員全員には、記念品として気象学会特製のマグカップが贈呈されました。このマグにはひまわりからの衛星画像と日本気象学会1997年度春季大会ベストポスター賞の文字が埋め込まれています(写真2、デザイン:楠研一会員)。ベストポスター



写真1 ベストポスター賞の受賞式にて、中央が伊藤昭彦会員。

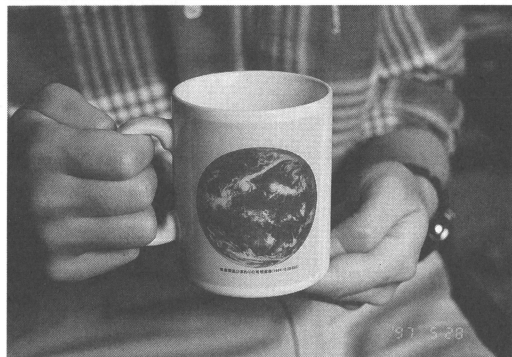
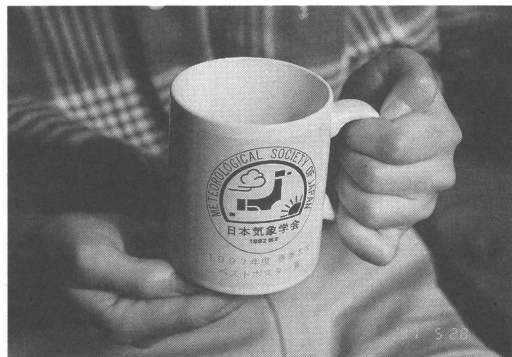


写真2 記念品として手渡されたマグ。ひまわりからの衛星画像と日本気象学会1997年度春季大会ベストポスター賞の文字が埋め込まれている。

賞に選ばれたポスターの写真は天気に掲載され(写真3)、お手本として全会員に参考にしてもらう一方、講演企画の責任で次期大会(北海道大会)においても掲示してポスター発表の活性化と内容の向上のためのお

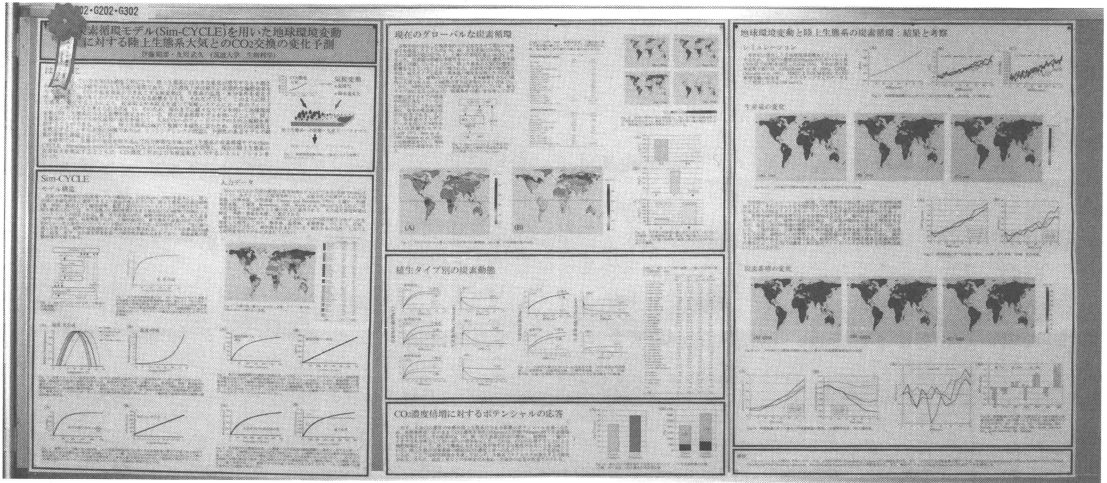


写真3 受賞作品となった伊藤昭彦会員のポスター。

手本としてもらうことになっています。ベストポスター賞の新企画により上記目標がどの程度達成されたかを講演企画は今後会員の意見を聞きながら検討し、

将来的には改善しながらより良いものにしてゆく予定です。

(講演企画委員会 田中 博)

会員の広場

ベストポスター賞を受賞して

もともと私は生物科学研究科に所属し、植物生態学が専門の大学院生です。発表内容は、今春提出した私の修士論文の内容で、陸上生態系の炭素循環モデル(Sim-CYCLE)によるシミュレーションに関するものでした。気象学会で発表をさせていただいたばかりか、ベストポスター賞までいただいたことは望外の光栄です。それには、地球環境と生物圏に関する研究を推進し、気象学者とも積極的に情報交換を図っている指導教官の及川武久教授(IGBP/GAIM 研究会主宰)の勧めがあつてのことでした。

© 1997 日本気象学会

ポスター発表は通算でまだ2回目で、百戦錬磨というわけではないのですが、自分なりに工夫した点と言えば、以下のようなものです。専門を異にする方々にもわかっていただきやすいよう、主題を絞り、紙面に太線で枠組みを書いて論理的な構造を明確にするような心がけました。そのことで、結果的に無駄なスペースを少なく、かつ煩雑さを回避することができたと思います。全体を、それぞれ縦横比が本の1ページと同じくらいの、大きな3枚組にしたのは私の発案です。単純ながら、それなりにオリジナリティが出せたのではないのでしょうか。内容は全てパソコンのグラフィック